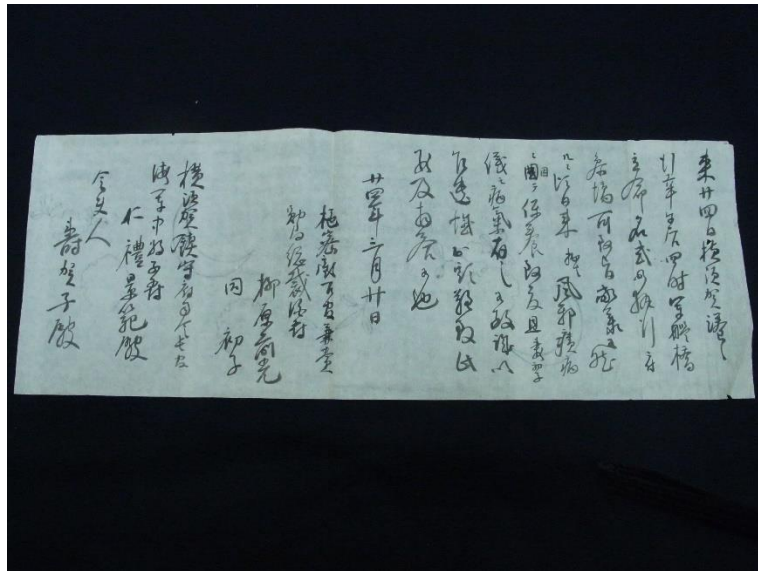


小展示 Vol.2

川崎市公文書館所蔵資料から見る明治日本

～仁礼景範夫妻宛て柳原前光夫妻書簡を読む～



【柳原前光と明治維新】

柳原前光は嘉永3年（1850）に生まれた。

ペリー来航はその3年後である。

幕末の朝廷で議奏・権大納言を務めた柳原光愛は父にあたる。父・光愛は王政復古政変で一時参朝を停止させられている。一方で、子・前光が政治に登場してくるのは慶応3年12月9日の王政復古政変後からである。

慶応4年（明治元年・1868）1月、わずか18歳で東海道鎮撫副総督（後に東海道先鋒副総督）に就任して「東征」に出発する。2月には新政府の参与に就任している。3月には甲州勝沼戦争の後の甲府に入り治安維持に努めている。4月には江戸城にて徳川慶喜の処分についての決定を伝達する役目を演じ、江戸城無血開城にも立ち会った。閏4月には房総地方の鎮撫を命じられている。

このように戊辰戦争では重要な役目を与えられている。

明治2年（1869）2月には使者として鹿児島に向かい、島津久光の功労を讃える役割を果たした。

柳原前光は徳川政権の崩壊に際して役割を与えられ、政治の表舞台に登場したのである。

【外交官としての柳原前光】

柳原前光は明治3年（1870）4月に外務権大丞に就任して日清関係の構築に向けて活動を行うようになる。明治4年3月には再び清国に赴いて条約締結のための交渉に尽力し、4月には伊達宗城のもとで日清修好条規の締結を行なう。しかし、その条文内容が国内外から批判を受けてしまい、その改正のためにも力を尽くすことになる。柳原は明治27年（1894）に44歳で死去する。奇しくもかつて柳原が修好条規の締結に心血を注いだ清国との戦争が始まった直後にこの世を去った。柳原前光は後の元老・西園寺公望と同年であり、ちょうど明治27年に西園寺は伊藤博文内閣に入閣している。西園寺も戊辰戦争期に政治の場に登場しており、柳原も長命であれば日本政府の重鎮になっていたかもしれない。ちなみに妻の初子は伊達宗城の娘である。

【仁礼景範の生涯】

天保2年（1831）2月24日、薩摩国に生まれる。文久3年（1863）5月、京都において姉小路公知暗殺の嫌疑により京都守護職（会津藩）に田中新兵衛と共に逮捕されたことがある。薩英戦争にも参加している。慶応2年（1866）にアメリカへ留学し、帰国後に兵部省・海軍省に出仕する。海軍兵学校長・東海鎮守府長官・中艦隊司令官を歴任し、明治17年（1884）に軍令事項を管掌する海軍省軍事部部長に就任する。明治19年（1886）には陸海軍の軍令管掌業務を統合した参謀本部が新設され、仁礼は参謀本部次長に就任した。明治21年（1888）には参謀本部の組織変更で海軍参謀本部長に就任した。明治22年（1889）には横須賀鎮守府長官に、明治24年（1891）6月には海軍大学校長に就任している。明治25年（1892）には海軍大臣に就任した。明治33年（1900）に死去する。

【明治24年3月20日仁礼景範夫妻宛て柳原前光夫妻書簡】

明治24年（1891）3月20日に柳原前光夫妻が仁礼景範夫妻へ宛てた書簡。その内容は、3月24日に予定されている明治天皇の横須賀港行幸に際しての軍艦「橋立」の命名式に夫婦そろって病気のために出席が叶わないことを伝えている。ちなみに使用されている和紙の背景には三日月模様などが施されている。

【翻刻】
来廿四日横須賀港之行幸午后四時軍艦橋立命名式御執行二付参場可致旨蒙忝候然ルニ頃日来拙者風邪癩病ニ因テ保養致度且妻初子儀モ病氣有之候故誠に遺憾出頭難敷此毎及相答候也
廿四年三月廿日
枢密顧問官兼賞
勲局総裁伯爵
柳原前光
同 初子
横須賀鎮守府司令長官
海軍中将子爵
仁礼景範殿
令夫人
寿賀子殿